

短歌（投稿順）

何もない動いてるから生きている無明の中にされど夫婦で
 珍しきピンクの花の夏蠟梅愛で合う一行宝登山の園
 祈ることなければ今朝も道はしのお地藏さまに両手を合わす
 長電話あきらめられてもたそがれの女同志に大切な時間
 天高く声張り上げる団長の小さな勇姿に自分重ねる
 留守中の録画に残る訪問者名札吊りを軒を見回す
 両神山と武甲山見守る植樹祭集う会場天も晴れ間を
 無人家の垣根越し見る白牡丹花弁大きく散り落ちそうな
 路を煮て一品豊かな膳となり出来はいかにと味見となりぬ
 ほろ苦き路の煮ものを夕食の卓上に添へ初夏を味はふ
 麗美なる薔薇を姪等と觀賞し娘の持て成しに感謝の尽きず
 武士の足音響きし金尾山今は躑躅の花に染まれり
 老いの我れ免許更新ボケ検査次は講習コース運転
 燕来て三十三年留め塔婆新緑の中法要済せ

皆野 石原 達也
 三沢 眞下 杏子
 国神 藤原マキ子
 皆野 萩原 初恵
 皆野 大澤 貴夫
 皆野 引間 万亀
 皆野 根岸 詩子
 下田野 新井 節子
 三沢 新井 民子
 三沢 新井 叶子
 下田野 浅見 豊子
 皆野 打木 昭廣
 上田野 沢 四方田利男
 皆野 村田ハツ代

俳句 榎本順江 選 投稿数 17 句

滝音や観音菩薩の声を聴く
 (評)どこかお寺参りの帰り道でしょうか。遠くから聞こえてくる滝の音が今参拝してきた観音様のお告げのごとく聞こえてきた、作者だけに伝わる声に思わず足を止めた。ほんのひと時、家から解放されての参拝。心洗われ軽い足取りの家路でしょう。二句目、母の愛用だった春の日傘は片付けがたく、ずっと同じ場所に置いてある。長年の月日にすっかり褪せてしまった。尽きない思い出の中に日傘をさした母がいる。命日にそっと偲ぶ作者です。三句目、印象深い獅子舞を見たのでしょうか。勇壮な獅子の動きが目に焼きつき、強い風に揺れる青葉の木々が宛ら獅子の動きに似ている。感性の豊かさが秀句になりました。母の忌や定位置に褪す春日傘
 下田野 新井 節子
 獅子の舞ふ所作宛らに青葉揺る
 三沢 新井 叶子
 当り前の生活ある幸桐の花
 三沢 新井 民子
 向日葵を庭に残して友の逝く
 皆野 新井 ちか
 学舎の跡に集いし螢たち
 皆野 花垣好比古
 洞窟を潜りし夏や水潜寺
 国神 鈴木 正文
 皆野 櫻井 早苗
 琴に聞くかの夕顔のはかなきを
 皆野 萩原 初恵
 珠なりし芍薬今日はほぐれけり
 皆野 引間 千鶴
 けたたまし火急か宝登山のほととぎす
 三沢 眞下 杏子
 小満や窓開け放ち背伸びする
 皆野 島 弘
 梅雨兆す天も見守る植樹祭
 皆野 根岸 詩子
 雑木林増やす時代の植樹祭
 上田野 沢 四方田利男